

報告② 子どもの育ちと学力保障

中西 さやか

(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科)

「社会的視点から保育を問い直す」というテーマについて、本報告では、学力という視点から子どもの育ちを考察することとした。近年、世界的な動向として保育と学校教育のつながりが重視される中で、乳幼児期からの知的教育や学びの在り方が問われるようになってきている。また、学力問題の枠組みの中で、保育の在り方が論じられている国々もある。これらの動向から、これまで学力について積極的に論じてこなかった保育においても、学力という視点から「どのような力を子どもに育むのか」という問題に取り組むことが重要な課題になってくるのではないかと考えられる。そこで、本報告では、保育カリキュラムの質に着目し、子どもの育ちと学力保障をめぐって何が論点となるのかを検討した。なお、ここでの「学力」とは、学校教育で培われる知識・技能というような狭義の学力に限らず、より幅広い意味での知的な能力を指すものとして論を進めることとした。

世界各国では、生涯学習の基盤としての幼児期の教育・学びが政策的な関心を集めていることを背景として、保育カリキュラムの質が問い直されている。そこでは、知的教育や学びの在り方が中心的なテーマとなっている。このことを踏まえた上で、以下の視点から保育カリキュラムの質をめぐって、何が論点となるのかについて整理した。

第一に、OECD の報告書¹におけるカリキュラムの類型に着目した。OECD は、保育カリキュラムの2つの伝統に着目し、英米圏の就学準備を重視するカリキュラム観と生活の中でのホリスティックな成長に重点を置くカリキュラム観があることを指摘している。前者は「就学準備型」、後者は「生活基盤（ホリスティック型）」とされ、保育カリキュラムにおける知的教育・学びへのアプローチが一様でないことが示された。第二に、ワイカート²によるカリキュラムモデルに着目し、保育カリキュラムが、教師の主導性が高い「プログラム型」のカリキュラムと、子どもの主導性が高いオープンなカリキュラムに大別されることを明らかにした。加えて、後者の子ども中心主義のカリキュラムは、幼児期の子どもにふさわしいとされる一方で、学力の階層差を拡大するとの危惧が示されていることに触れた。第三に、諸外国のナショナル・カリキュラムの分析³から、教育目標をめぐって、目標への到達を強調するコンピテンシーベースのアプローチと方向目標を掲げる子ども志向のアプローチがあることを明らかにした。

以上のことから、保育カリキュラムの質をめぐって、①就学準備型か生活基盤型か、②プログラム型のカリキュラムかオープンなカリキュラムか、③到達目標か方向目標か、④コンピテンシーベースのアプローチか子ども志向のアプローチか、という論点を抽出した。

報告の最後に、学力問題を背景としたドイツの保育カリキュラム改革において、教育の機会均等という観点からコンピテンシー志向の政策が展開される一方で、子どもが主体的に学ぶプロセスを *Bildung* (ビルドゥング) という視点から記述しようとするアプローチがあることに触れた。本報告で整理したことを踏まえながら、一人ひとりの子どもの育ちに軸を置いた学力保障の在り方を探究することが、今後の課題である。

¹ OECD (2006) *Starting Strong II: Early Childhood Education and Care*. Paris:OECD publishing.

² ワイカート, D.P. (2015) 『幼児教育への国際的視座』(浜野隆訳) 東信堂.

³ Oberhuemer,P. (2005) International Perspectives on Early Childhood Curricula. *International Journal of Early Childhood*, 37(1): 27-37.